

福沢諭吉の運動會

——近代のスポーツと日本人の身体観（続）

白幡洋三郎

戦乱の町のブランコ

慶応四年五月十五日、江戸まで攻めのほつてきた官軍が、上野の山にたてこもった幕府の兵、彰義隊に、ついに総攻撃を仕掛けた。

慶応四年に入って、王政復古の号令、徳川慶喜の追討令により官軍はすでに江戸に入っていた。しかし幕府に忠誠を誓う侍も優勢であり、官軍の兵とのこぜりあいには日常的に起こり、江戸の町はさわめて不穏な雰囲気の中にあつた。江戸のまちびとの中には、家財道具を大八車に載せて、ほとんど夜逃げのような格好で江戸をあとにする者が、すでに大勢いた。

しかしそのような雰囲気の中で、前日と変わることなく黙々と西洋の書物の読解に取り組む一団がいた。慶応義塾の塾生たちがそれである。

福沢諭吉は後年、その頃の様子を、つぎのように回顧している。

「……その前後は江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋も皆休んでしまつて、八百八町は真の闇、何が何やらわからないほどの混乱なれども、私はその戦争の日も塾の課業を罷めない。上野ではほとんど鉄砲を打っている、けれども上野と新銭座とは二里も離れていて、鉄砲玉の飛んで来る気遣はないというので、丁度あるとき私は英書で経済の講釈をしていました。大分騒々しい様子だが煙でも見えるかというので、生徒らは面白がつて梯子に登つて屋根の上から見物する。何でも昼から暮れ過ぎまでの戦争でしたが、此方（こちろ）に係がなければ怖いこともない。」（福翁自伝⁽¹⁾）

新銭座というのは慶応四年、それまで築地・鉄砲洲にある中津藩奥平家の中屋敷に設けられていた塾を移した場所である。慶応義塾とは、慶応年間に始められた任意参加の塾というほどの意味で、鉄

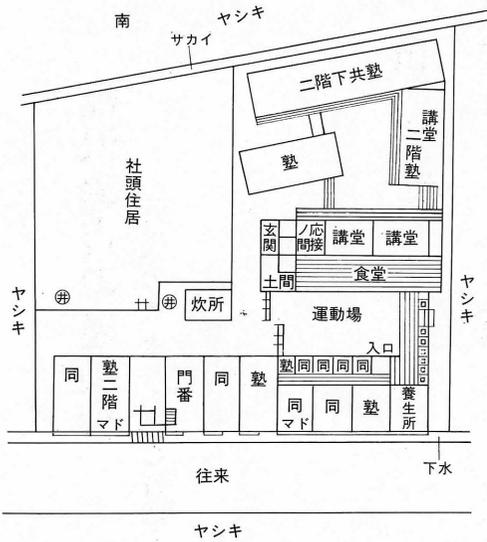


図2 明治二年新銭座塾舎平面図(同右)

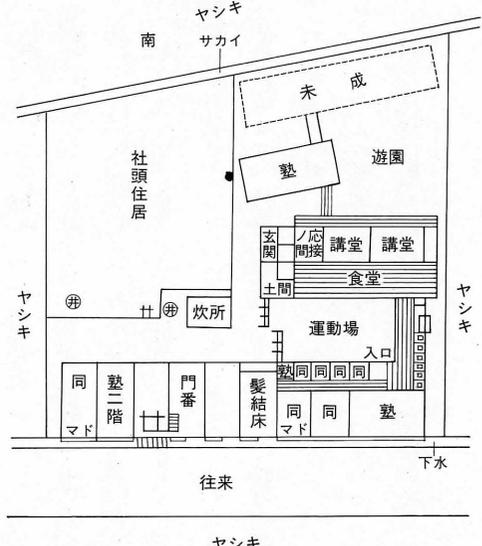


図1 明治元年新銭座塾舎平面図(『慶応義塾百年史』より作成)

砲洲から新銭座に移った後に定着した名称である。新銭座は現在の東京港区の海沿いに近い地域名である。この地域にあって今の芝離宮(もと紀州藩邸)に近い「有馬中屋敷」を、前もって福沢諭吉は買っていた。そこには「運動場」が設けられ、塾生たちは、積極的に身体運動を行うよう奨励されていた。「慶応義塾五十年史」には「中庭を以って運動場と定め、『ブランコ』を造りて盛んに運動」をさせたとの記述がみられる。⁽²⁾

明治元年の新銭座塾舎平面図(図1)には「遊園」と「運動場」が、明治二年のもの(図2)には「運動場」の文字が見える。⁽³⁾

『慶応義塾五十年史』には先輩からの話をもとにつくったという鉄砲洲の塾舎平面図が掲げられている。その運動場の中にはっきり「ブランコ」と記されている。しかしこの平面図は新銭座時代の図(図1・図2)とはほとんど同じである。

芝新銭座時代の慶応義塾の運動場に、間違いなくブランコがあったかどうかは、『五十年史』『七十五年史』『百年史』とつづく慶応義塾史を参照するだけでははっきり確認できない。しかし、創設初期から慶応義塾が運動場を設けたこと、ブランコのような遊具・運動具を備えて運動を奨励したことは確実である。

いずれにせよ勤王・佐幕に分かれ、まなじりをけっして、生死を賭けて戦っている武士集団を後目に、慶応義塾の塾生がブランコに取り組んでいた姿を思い浮かべてみると、むしろ心が和む。そして

歴史の不思議さといった思いにおそわれる。

塾運営に当たたる福沢論吉にしてみれば、日本の将来を託すことができるのは、徳川幕府でもなければ官軍の側でもなかった。勤王でもなく佐幕でもなく、海外の文明国を正當に理解できる、青年の集団を少しでも多く生み出すことが日本の進路に役立つという考えだっただろう。福沢論吉の当時の思いの一端がうかがえる個所が、先の『福翁自伝』の一節に続いている。

「此方こちがこの通りに落ち付き払っていれば、世の中は広いものでまた妙なもので、兵馬騒乱の中にも西洋の事を知りたいという気風はどこかに流行して、上野の騒動が済むと奥州の戦争となり、その最中にも生徒は続々入学して来て、塾はますます盛んになりました。顧みて世間を見れば、徳川の学校は勿論つぶれてしまい、その教師さえも行衛ゆゑがわからぬくらい、まして維新政府は学校どころの場合でない、日本国中いやしくも書を読んでいるところはただ慶応義塾ばかりという有様……」⁽⁴⁾

この当時の慶応義塾をふりかえりながら、十八世紀に本国が完全に占領されたにもかかわらず、唯一オランダ国旗をひるがえしていた出島を例に挙げて、オランダ王国は滅亡したことがないとオランダ人が誇りにしているという話を持ち出している。

「……この慶応義塾は日本の洋学のためにはオランダの出島と同様、世の中に如何なる騒動があっても変乱があっても未だ曾て洋学の命

脈を断たやしたことはないぞよ、慶応義塾は一日も休業したことはない、この塾のあらん限り大日本は文明国である、世間に頓着するなと申して、大勢の少年を励ましたことがあります。」⁽⁵⁾

福沢論吉は幕末の混乱、維新のいくさの中でも、将来の日本を思いやれば、学問を中断することはできないと考えていた。そして、その学問を持続的に行うためには、肉体の健康が、そして健康を維持するためには身体運動を欠かすことができないという考えも持っていた。

慶応四年、上野戦争の戦乱の最中に、芝新錢座の慶応義塾の校庭に揺れていたブランコを、戯画的に見ることもできる。だが、福沢論吉にとっては、自分の思想表現の大事な一部だったのではないかと私には思える。

国の針路をめぐる、銃や刀を手にまなじりを決して闘っている集団がすぐかたわらにいる。そのそばでブランコやシーソーに乗るのは、じつに明確な意志表示ではないか。

福沢論吉の思想の大きさをさまざまに論じる論稿は、枚挙に暇がない。だが、福沢論吉の思想なるものは、「思想」を前面に押し出した文章の中にのみ見いだされるわけではないだろう。日常の振舞いや、一見思想的文脈とは遠いように思える何気ない発言の中に、じつは彼自身の大きな覚悟が示されていることがある。

じっさい、明日は日本がどのようになっているかと、ほとんどの

青年が血気にはやっていたとき、とにもかくにも学問のスケジュールをこなすということは容易な心構えではない。それ以上に、まさに日常的に白刃がひらめく、殺気だった町なかに、「遊園」や「運動場」を設け、弾丸が飛び交うとき、ブランコに乗るといふ姿勢はきわめて鮮明な思想表現であつたらう。

そのような態度を、ただ単に福沢諭吉の身体観としてしまうのは、彼のもつ豊かな思想の全体を矮小化してしまうおそれがある。

がしかし、慶応義塾が、存廃の危機を含め、その後迎えたさまざまな試練のうち、幕末・維新期の、それも所在地のお蔭元での上野戦争の時ほど、まさしく慶応義塾にとつて、また福沢諭吉にとつて、覚悟を迫られたときはおそらくないだろう。

そのときもつとも鮮明に福沢諭吉の態度を示しているように思えた一つが、私には塾の運動場における身体運動、ブランコ遊びだったのである。福沢諭吉はこれをもって、慶応義塾の姿勢を、上野戦争で向い合う双方の軍勢に対置したのだと思えて仕方がなかったのである。

以下、彼の思想、彼の人間観の中において、身体運動はどのような位置を占めていたのか。開国期の一日本人の身体観の例としてたどつてみることにしたい。

先ず獸身を成して、後に人心を養へ

——福沢諭吉の心身論

福沢諭吉は早くから身体運動に注目していたようだ。その証拠はすでに前稿（『序論』）にも挙げたが、福沢が慶応四年に、芝新銭座に塾を移した頃に制定された「食堂規則」のなかにみられる。

「午後晩食後は、木のぼり、玉遊等、『ヂムナスチック』の法に従ひ、種々の戯いたし、勉つとめて身体を運動すべし」という条項である。

そしてこれが生まれる背景には、福沢諭吉の三度にわたる欧米行の際に見聞した諸学校の姿があつたようである。慶応二年（一八六六）に著した『西洋事情初編』のなかで、ロンドンの「キングスコーラーージ」の休憩時間が生徒の自由に任せられ、その間、身体運動・遊戯を行いやすくするための環境づくりが図られていることを紹介している。

「教授の間、言語せず親指せず、法を犯す者は罰あり。然れども間時は随意に遊そぶを禁ぜず。是がため学校の傍には必ず遊園を設て、花木を植へ泉水を引き遊戯奔走の地となす。」（『西洋事情初編 卷之一』⁽⁷⁾）

教室での授業は嚴格だが、休憩時間は生徒に自由な身体運動をさせていること、日本の教育施設である寺子屋や私塾には存在しなかつた「遊園」つまり校庭を紹介しているのは、福沢自身の運動およ

び運動施設に対する関心の高さではないだろうか。右の引用個所に
 続けて、

「柱を立てて梯を架し綱を張る等の設をなして、学童をして柱梯にの
 ぼり或は綱渡りの芸をなさしめ、五禽の戯を為て四肢を運動し、苦
 学の鬱閉を散じ身体の健康を保つ⁽⁸⁾」

と校庭の機能と備えるべき施設を説明している。以上のような考



図3 華陀、五禽戲（勢）『導引體要』谷口書店、1986より

えにしたがって慶応義塾の校庭も整備されたものと思われる。

なお「五禽の戯」とは近世の儒医等によってよくとなえられた、
 一種の徒手体操のような運動である。「虎勢」「熊勢」「鹿勢」「猿
 勢」「鳥勢」の五つの動作があり、虎、熊、鹿、猿、鳥それぞれの
 動物がもっている特徴のある動作に似せて身体を動かす「体操」で
 ある。(図3)

華陀という人物によって著された書にある「五禽戯」と称する身
 体動作を古典として、幕末開国の頃、西洋の体操を理解するとき類
 似のものとしてもちだされた。⁽⁹⁾ 福沢諭吉は、これをよく知っていた
 ので、一般の理解を容易に得るため、四肢の運動を「五禽戯」にな
 ぞらえたのであろう。⁽¹⁰⁾

芝新銭座にあったころの慶応義塾には「運動場」があり、ここに
 ブランコやすべりだいなどの運動施設が設けられていたらしいこと
 はすでに述べた。明治四年に、移転した三田でも、塾生の運動のた
 め、校庭にブランコや鉄棒、シーソーなどが設置されたという。⁽¹¹⁾

身体運動を教育の一環に含めていた福沢諭吉の教育論には、『福
 翁自伝』の文章にみられるように、次のような前提があった。

「……子供の教育法については、私はもっぱら身体の方を大事にし
 て、幼少の時から強いて読書などさせない。まず獣身を成して後に
 人心を養うというのが私の主義であるから、生まれて三歳五歳まで
 はいろのは字も見せず、七、八歳にもなれば手習いをさせたりさせ

なかったり、マダ読書はさせない。それまではただ暴れ次第に暴れさせて、ただ衣食にはよく気を付けてやり、また子供ながらも鄙劣なことをしたり賤しい言葉を真似たりすればこれをとがめるのみ、その外は一切投げやりにして自由自在にしておくその有様は、犬猫の子を育てると変わることはない。すなわちこれがまず獣身を成すの法にして、幸いに犬猫のように成長して無事無病……⁽¹²⁾」

これは、明治三十年から三十一年にかけて口述筆記された、いわば晩年の言葉であるが、同じような発言がかつて明治十六年六月、二人の子供がアメリカ留学する際に与えた心得書きにすでにみられる。

そこには、身体第一という福沢の常の主張がしたためられている。「一、兩人共、学問ノ上達ハ第二ノ事トシテ、苟モ身体ノ健康ヲ傷フ可ラズ。」⁽¹³⁾

福沢諭吉の子育ての基本姿勢は、まず身体をつくる、健康に育てることにある。そのことを「獣身を成す」と表現しているのである。しかしなぜ、人間のからだ「人身」ではなく獣のからだ「獣身」なのか。

もちろんこれは、身体を価値の低いものとみなし、獣の持ち物とみて「獣身」と言っているわけではない。育てる際に、人間の子供のからだも、獣の子のからだも、つくりあげてゆくプロセスと、目標に変わりがないという考えの表明である。肉体の維持と健康がま

ず大事なものは、獣も人間も変わらないからである。

もうひとつ、同じ趣旨で、さらに詳しい考えを、明治二十八年中に書かれた『福翁百話』の中の「身体の發育こそ大切なれ」と題する論説にも見いだすことができる。⁽¹⁴⁾そこでは、人間も生まれ出たときは一種の動物とみなすべきで、知恵は当初問題にすべきではないこと、まず身体の發育を重んじるべきで、動物の子を養う際と同じ心得が必要であることが説かれている。そして、

「先ず獣身を成して後に人心を養へとは、我輩の常に唱ふる所……」⁽¹⁵⁾と書いている。

したがって、福沢諭吉の教育論からは、必然的に身体の教育を重視すべき年齢層が考えられる。その段階にある子供たちのための教育機関が特別に必要であるという結論も、また当然生まれてくる。

それが、およそ十二―三歳以下の少年を収容する慶応幼稚舎の設立(明治七年一月)につながったのである。

「……運動の爲めには体操もあり柔術もあり、課業の暇には運動場に遊戯して、玉投も宜し相撲も苦しからず、身体を強くする方便とあれば之を留めざるのみか唯大に勧めるのみにして、老生の心には諸子が半死半生の色青ざめたる大学者となるよりも、体格屈強なる壮年たらんことをこそ願ふ……」(明治二十五年一月二十五日慶応義塾幼稚舎にて) 明治二十五年一月二十六日「時事新報」雑報⁽¹⁶⁾

知育については、別々に行われたが、身体運動の一大イベントで

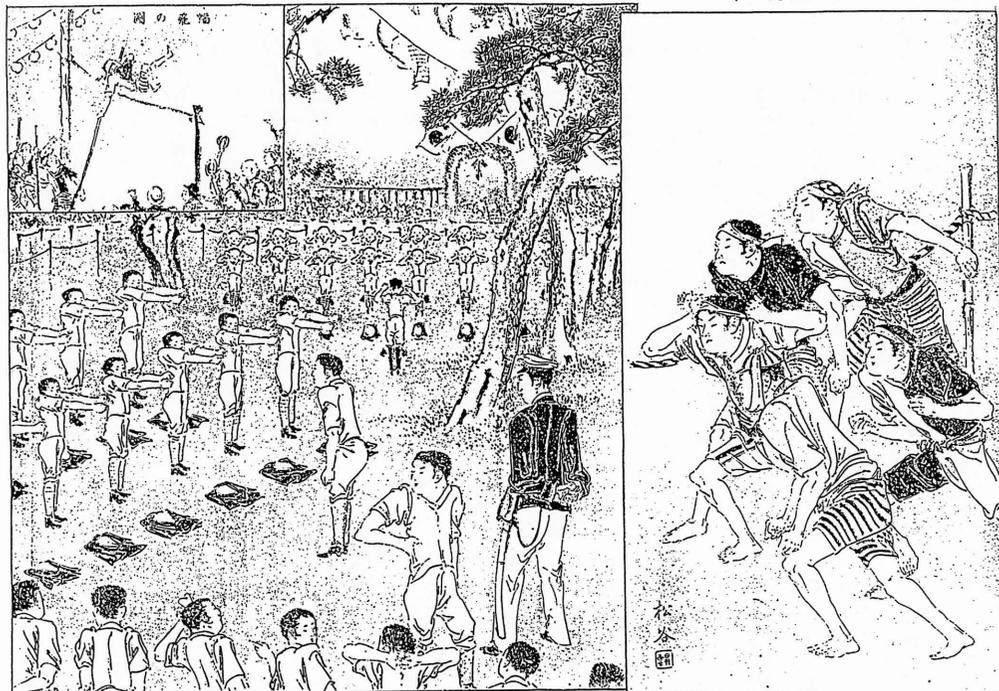


図4 慶応義塾大運動会（「風俗画報」第74号 明治27年7月10日）

ある慶応義塾運動会（図4）は、幼稚舎の生徒も含めて開催された。幼稚舎生徒の出し物である体操は、とくに関心を集めた。しかし福沢諭吉の身体運動論は、授業や特別な催しとしてのみ行われるのではなく、日常的な起居動作全体が運動であるという考えだったようだ。

福沢諭吉自身の身体ができあがってきた過程も、家事の手伝いやその他の労働で知らず知らずに身体を動かす機会に恵まれていたという理解だった。「動を、とりたてて強調し、特別に位置づける、といった扱いはしない。後年語った『自伝』中に

「ソレカラ私の身体運動は如何だとその話もしましょう。幼年の時から貧家に生れて、身体の運動はイヤでもしなければならぬ。ソレが習慣になって生涯身体を動かしています。」¹⁷⁾

という発言がある。このような、生活の中の身体動作、まさに自然体の「運動」こそ、一つの「獸身を成す」の法だったのである。

「少年の健康屠殺場」東京大学

福沢諭吉の官学嫌い、官界嫌いはさまざまな発言の中に現れる。その際、健康や身体に対する考え方も、官学嫌いになる要素があったようだ。

「既に二十年前のことです。長男一太郎と次男捨次郎と兩人を帝国大学の予備門に入れて修学させていたところが、とかく胃が悪くな

る。ソレカラ宅に呼び返して色々手当すると次第に宜くなる。宜くなるからまた入れるとまた悪くなる。とうとう三度入れて三度失敗した。その時には田中不二麿という人が文部の長官をしていたから、田中にも毎度話をしました。私方の子供を予備門に入れて実際の試験があるが、文部学校の教授法をこのままにしてやって行けば、生徒を殺すにきまっている。殺さなければ気狂いになるか、然らざれば心身共に衰弱して半死半生の片輪者になってしまうに違いない。

丁度この予備門の修業が三、四年かかる、その間に大学の法が改まるだろうと思って、ソレを便りに子供を予備門にいらせておくが、早く改正してもらいたい。このままで置くならば東京大学は少年の健康屠殺場と命名して宜しい。早々教授法を改めてもらいたいと、懇意の間柄で遠慮なく話はしたが、何分埒が明かず、子供は相変わらず三カ月やっけて置けば三カ月引かして置かなければならぬといううな訳けで、何としても予備門の修業に堪えず、私もついに断念してしもうて、それから此方こちらの塾（慶応義塾なり）に入れて普通の学科を卒業させて、アメリカに遣って彼の大学の世話になりました。私は日本大学の教科を悪いと言うのではない、けれども教育の仕様が余り嚴重で、荷物が重過ぎるのを恐れて文部大学を避けたのです。その通りで今でも説は変えない。何としても身体が大事だと思えます。⁽¹⁸⁾

この表現は、官学嫌いがきわめて強烈に現れている。東京大学

を「健康屠殺場」というのは、罵りの言葉に近い。子ぼんのうの論吉が、自分の大事な長男、次男二人とともに、東京大学で台無しにされかかった、という恨みもあるだろう。

もっとも、二人の息子が相当に厳しい授業についていけなかったとも考えられる。ただし、大学予備門＝東京大学をやめさせて慶応義塾に入れたその発端は、少なくとも表向きは身体健康問題であった。

福沢諭吉の教育論、とりわけ青少年の教育についてのいくつかの意見中には、彼のもっていた身体観がはっきり現れる。そしてその意見は、彼自身の子育て論でもあった。自分自身の子供である長男一太郎、次男捨次郎の養育においてもこの考えは実践に移されていたようである。

後年、アメリカに留学させたこの二人に、頻繁に書き送った手紙は、一三〇通にもものぼるが、その中にはしばしば、身体をつくれ、健康に気を付けよという文面が含まれていた。

「学問は第二着、何事も健康を保ち得て後の分別なれば、撰生専一に存候。」（一太郎、捨次郎宛 明治十六年八月二十七日）⁽¹⁹⁾

「最早嚴寒の時節に相成、……幾重にも用心に用心被致度、身体撰生の為には金圓を愛しむに足らず、出来候丈けの手当可致候。捨次郎は毎日時を定めて運動いたし候由、一太郎は如何や……」（同

明治十六年十二月二十二日）⁽²⁰⁾

「学芸よりも大切なるは身体なり。呉々も大切に可被致。」(同 明治十七年二月二十二日)⁽²¹⁾

「何分にも身体の健康は大切なるに付、勇を鼓して心身を活発に被致度……」(一太郎宛 明治十七年十一月四日)⁽²²⁾

「来年になれば貴様方兩人も一度び帰国、……拙者も養生は怠らず相待候。貴様も同様、よく運動して、屈強偉大なる身体を父母に見せ候様心掛け度事に候。」(一太郎宛 明治二十年七月二十九日)⁽²³⁾

ただし、このように手紙を並べて福沢諭吉の身体への関心の高さを指摘してみても、子供の健康を気づかうのは親の常であるといわれればそれまでである。しかし福沢諭吉の、身体・健康への発言は、世間なみの親が子に対して発言するものより、もっと積極的であったと私は考える。とりわけ当時の一般的な身体の方や、普通の親の身体観に比べれば福沢諭吉の身体への関心は異常に強かったといってもよいだろう。

「学問は第二着」とか「学芸よりも大切なるは身体」という発言はこのことを証明するものである。しかもこれに似た意味の発言は何度も現れる。

福沢諭吉は、きわめて子ぼんのうな父親で、むしろ親馬鹿といえるほど子どもの成長に一喜一憂していた。それだけに、手紙の内容を身体への関心の強さとみるか、子どもへの関心の強さとみるかは、容易ではない。

とはいえ、一太郎や、捨次郎がまだ歩き出すか出さないかの時期に、芝新銭座の慶応義塾に運動場を設け遊具を設置したことを考えれば、自分の子どもかわいさだけの身体・健康への関心だとはいえないのである。

長男・次男の一太郎、捨次郎が留学中、他家へ嫁いで行った娘たちにもできはじめ、福沢邸へ遊びにくるようになる。明治十九年一太郎宛の手紙に、次のように、自分の家に子供・孫のための遊び場を設けている様子を書き送っている。

「……先日より……旧馬や跡並びに馬場とも一面に地ならし致し、高麗芝をうゑて兒女子の遊び場に致す積り、最早半分計出来申候。」

(一太郎宛 明治十九年四月二十二日)⁽²⁴⁾

住宅に付随して和風庭園をしつらえるのではなく、子供の運動のための芝生の庭をめざしている。戦後、住まいの洋風モダンイメージになった芝生の庭の先取りのようにも思える。当時としてはきわめて破格な考えによる住宅づくりだった。

「運動養生」から「摂生」へ

——福沢諭吉の身体摂生法

これまでみてきたのは、子供・幼年の身体育成期への発言である。福沢諭吉が責任をもたねばならない自分の子供や、慶応義塾の生徒たちのための、教育という視点からの身体論・健康論である。つま

り自分以外の、いわば他人の身体・健康への発言と関心であった。では、福沢諭吉自身の身体・健康への対応はいかなるものであったのだろうか。

福沢諭吉は、生涯に二度重病に陥った。二度目は、晩年に近い。自ら始めた新聞社、時事新報社の社説に健筆を毎日ふるっていた明治三十一年九月、突然襲った脳溢血である。これは一カ月半の闘病で回復。しかしこの後は、口述筆記が多くなり、時事新報への社説に自ら筆をとることがなかった。そして三年後の明治三十四年一月、脳溢血を再発して翌月死去する。

福沢諭吉の養生への発言は、これをさかのぼる一度目の大病のあとに、つづいてあらわれる。その一度目の大病は、明治三年、三十歳の年にかかった発疹チフスだった。これが、福沢にとくに養生を考えさせる機会となったようだ。

「……私の養生は明治三年三十七歳大病の時から一面目を改め、書生時代の乱暴無茶苦茶、ことに十年間鯨飲の悪習を廃して、今日に至るまで前後およそ四十年になりますが、この四十年の間にも初期は文事勉強の余暇を偷んで運動養生したものが、次第に老却するに従い今は養生を本務にしてその余暇に文を勉めることにしました。今でも宵は早く寝て朝早く起き、食事前に一里半ばかり芝の三光から麻布古川辺の野外を少年生徒と共に散歩して、午後になれば居合を抜いたり米を搗いたり一時間を費やして、晩の食事もチャント規

則のようにして、雨が降っても雪が降っても年中一日も欠かしたことはない。⁽²⁵⁾」

この文章からすると、書生時代は、健康・身体には無頓着。元気に任せて、飲みたい、食べたい、やりたい放題。ときには乱暴もはたらいているようだ。

とくに、大阪の緒方洪庵の塾にいた頃の乱暴な振舞いは、少し度が過ぎていると思われることもある。(福翁自伝)⁽²⁶⁾

しかし私塾を開いてからは、彼の表現を借りれば「運動養生」、つまり健康のための積極的な身体運動を行った。その時の関心が、慶応義塾と名づけた芝新銭座の塾構内に、運動場、遊園を設けたり、遊具を導入したりすることにつながったようだ。

「老生は帰来不相替運動を怠らず、毎朝食前小山完吾氏外七、八人と共に広尾の辺一里か一里半を歩行致候。午後は居合を抜き、又米をつく等、養生一偏、其御蔭なるか今日まで無病なり。」(箕輪五助宛書簡、明治二十九年十一月十七日)⁽²⁷⁾

とあるように、いつも運動と健康をむすびつけて考えていた。

だが、福沢諭吉の身体運動論には、「スポーツ性」とでも表現するべきか、競技、ゲーム、チームプレーなどについて論じたもの一つもない。身体を鍛え、鬱屈を吹き飛ばす機能を期待できるたぐいの運動が視野に入っていた程度というべきだろう。つまり「スポーツ」よりは「レクリエーション」に関心があったのだ。

後半生に福沢諭吉が行っていた運動は、「摂生」と表現されるものであった。それは、「居合」と「米搗き」であり、それに加え、時折でかける遠足・旅行などであった。

「拙者も両三日中子供をつれて鎌倉まで一寸参る積り、実は平生多忙ゆゑ折々は養生と存じ頻に心掛居候事なり。併し乃翁尚健康なり。今朝も不相替米を搗き終て此手紙を認候次第……」（捨次郎宛、明治二十年九月一日）⁽²⁸⁾

このように健康と身体のために米つきや居合抜きを欠かさなかった。とりわけ居合については詳細な記録が残っている。

その記録は『全集』中に「居合数抜記録」とあるもので、明治二十六、二十七、二十八の各年に、一日およそ五時間ほども、それぞれ一〇〇〇本の居合抜きを行っている。⁽²⁹⁾

これは、きわめてきつい運動であり、健康のためのレクリエーション的運動の域を越えているようにも思える。しかし、これほどの激しい「数抜き」は、一年に限られた時しか行わず、ふだんの居合はもっと数が少ないものだった。

全体として、彼の晩年は激しい身体運動を避け、筋肉をほぐすといった程度の運動か、慣れた動作の肉体作業程度に収まっていた。福沢自身の用語で言えば「運動摂生」から「摂生」へと移行させて行ったのである。

スポーツか身体運動か

——福沢諭吉のスポーツ観

福沢諭吉と身体運動をつなぐものはスポーツではなかったようだ。少なくとも西洋起源の近代スポーツではなかった。彼が身体の望ましい状態をつくりあげ、維持してゆくためにとりあげた身体運動は、「居合」という日本の武士文化が生み出した修養・訓練の動作であり、また「米搗き」という生活に密着した肉体労働であった。娯楽、遊戯的な要素をもつものは、散歩くらいしかなく、のち教育に積極的にかかわるにつれ、楽しみを含んだ遠足・海水浴・運動会をとりいれていったにすぎない。

当初とりいれたブランコ・シーソー・鉄棒などから予測して、また世間的には文明開化の旗手、海外文化導入のリーダーと受け取られていた人物として、その後西洋文化を取り入れることに積極的に立ち回るといふ想像も可能である。西洋スポーツ、近代スポーツの導入に力を尽くす姿を思い描くこともあながち無理ではない。しかし福沢諭吉の実際はそうではなかった。

福沢諭吉は、精神に先立つ肉體、心をささえる身という、今でなら普通の心理から導き出される運動論を語り続けた。これは、とりたてて西洋的でもなければ、日本的でもない。

慶応義塾の運動会では、「担架競走」などという日本的でも西洋

的でもない不思議な競技が用意された。それ以外には、「サックレース」とか「二百・四百ヤード競走」とか、西洋起源の競技が行われ、あたかも西洋スポーツの導入の場というふうにも見えたが、実は昔から存在する、屋外での娯楽、遊山や花見と同様な催しとして受け入れられていたふしがある。

前稿で紹介した雑誌『風俗画報』明治二十五年四月十日の記事「運動会とお花見」という論説のように、花見は屋外に出かけて弁当を広げ、鬼ごっこやまり遊びなどをして一日を過ごすもの、だから花見は運動会とかわらないというのがふつうの考えだった。⁽³¹⁾

慶応の運動会でも、学生の経営する「学生茶店」は、たいへん人氣があり、飲んだり食べたりしながら競技を楽しむ雰囲気であった。⁽³²⁾ほとんどの参加者見物客にとっても、当時の意識では花見とそれほど変わりが無いものと受け取られていたことだろう。

もちろん、このような催しそのものが、当時の人々には、バタ臭さ珍しさと映ったようである。風俗画報は、何度も慶応義塾の運動会を絵入りで報じている。(図4)

福沢諭吉にとっての身体運動とは、運動会の出し物のうちの競技部分を指して言うのではなく、「学生茶店」や余興として行われる「滑稽技」を含めた運動会全体が、身体運動の場として受け取られていたと考えられる。

西洋起源の競技スポーツの多くを導入するのに、たしかに慶応義

塾が先駆的に果たした役割は大きかったが、福沢諭吉の身体運動概念は、スポーツへ、専門的スポーツマンの出現へとつながってゆくものではなかったように思われる。

もともと運動会は、身体を鍛える目的と、娯楽とがないまぜになつている催しである。さきに述べたように、民衆の間では花見とかわらないものと受け取られていたふしがある。そのうえ遠足とも混同されていた。

明治後半期は、遠くの運動会会場まで弁当持参で徒歩往復することもあり、それが「遠足」とされていた。また遠足の目的地で、相撲や徒歩競走などを行い、これを逆に「運動会」と称してもいた。

(佐藤秀夫「運動会の考現学」『月刊百科』二二九号、一九八一年九月)

「昨日は、本塾の生徒三百五、六十人も可有之、飛鳥山へ参候に付、或は途中先方不都合を生じては不面目と存じ、拙者も態と同行致し、角力綱引旗奪等にて午後まで快遊、無事に帰塾致し候。」(一太郎、捨次郎宛書簡、明治十六年十一月四日)⁽³³⁾

この記事は、当時福沢諭吉も「遠足」「運動会」を区別していなかったことを示しているし、またそれを表現する言葉もなかったことがわかる。ただ「参候」^{さんこう}だけだったのである。

つい最近まで、遠足といえ、目的地で運動会のような競技をする催しだった地域もあるという。

明治時代、「花見」、「遠足」、「運動会」は、すべて同じ催し物だった。何を主題に掲げるかによって命名に、バラエティーがあったに過ぎない。その本質は、身体運動と娯楽との共存であり、スポーツとレクリエーションの未分化であった。そしてそのような行事こそ、近代初頭の日本で、もっとも広く受け入れられた「スポーツ」、身体運動だったのである。福沢諭吉が関心を示した身体運動も、近代スポーツではなく、まさしくこんな催しだった。

しかし福沢諭吉が西洋スポーツに関心を示した例が二つある。それはアイススケートとローンテニスである。しかしいずれも、二人の息子が手紙で知らせてきた行動をただ追認しているにすぎないともいえる。アイススケートについては、次の手紙からその事情をうかがうことができる。

「スケートの運動を為し、これが為二十弗にて靴とスケートと兩人
 器具、つつ調べ、価二十弗のよし。誠に満足の至なり。何卒其靴もス
 ケートも損ずる程に動作いたし、行々はヤンキイボーイの技倆も圧
 する様に相成度事に候。」(一太郎・捨次郎宛、明治十七年二月二十
 二日)⁽³⁴⁾

二人の息子は、高価なスケート靴のセットを買ったと知らせたら、親がどんな反応を示すか少々心配しながら、手紙を書き送ってきた。これに対して福沢諭吉は身体づくりのためになる金にむだ遣いはないという持論からか、喜んでみせ、しっかりときつぷすほど練習し

てアメリカ青年をしのいでほしいと励ましている。

これは、スケートへの関心というよりは、息子の行為に関心を示し、その健康への期待し得る効果について喜んでいて、というべきだろう。

一方、テニスでは、何度か次男捨次郎との手紙のやりとりがある。「ローンテニスの道具は横浜にて調^ビ候よし、未だ其直^直(値)段を聞かず。直段次第にて其地より携^{たづ}帰るも可^し然^る存候。」(捨次郎宛、明治二十一年一月十六日)⁽³⁵⁾



「ローンテニスの道具、横浜にての直段^{直段}はの如きもの四本とゴムの玉十二個を壺組として其価凡そ二十五、六円と申事なり。

直段次第にて米国より携帰る様致し度、場所は旧馬やの処を芝に致し、平地巾七、八間長さ二十五、六間あり、テニスには丁度宜しと人も申居候。」(捨次郎宛、明治二十一年一月二十三日)⁽³⁶⁾

捨次郎は、帰国を前にしてテニスの道具を購入したいと書いてよこしたらしい。

この文面から、福沢諭吉がテニスの道具を買うのは無駄な支出、過大な支出と思っているとは断言できないが、少なくともただちにもし手を取上げて賛成して、積極的に購入に走っている様子は見えな

い。⁽³⁷⁾ かつて福沢諭吉は、健康のためには金に糸目をつけるなど言っていた。ラケット四本とボールで、二十五、六円が、それほど高額だ

とは思っていなかったはずである。留学へ出発した直後の息子二人へ、年間一〇〇〇円以上の支出は当然であるとの手紙を書いているほどだ。

にもかかわらず、あまり熱のこもった、テニス道具への関心が無いのは、テニスと健康、テニス道具の購入と身体運動とが、福沢諭吉の頭の中ですぐにしっかりと結び付くものではなかったからではあるまいか。

とはいえ、親馬鹿の諭吉と言われるのも仕方がないかのよう、自宅の庭に、芝生の平面は用意するのであった。だがこれも、孫たちの遊び場との共用もしくは転用であったかもしれない。

楽しみと運動との共存

——運動会と遠足

福沢諭吉にとって、身体運動とはそれそのものが、楽しみ・快感・社交などの自立的な価値をもち、人間にとって欠かすことができない必要なもの、という考えは希薄だったのではないか。身体運動は、たしかに欠かすことはできないが、それは健康の維持という目的を満たすために必要であり、肉体の健康を媒介として意義ある有用なものになるという考えだったと理解すべきだろう。

スポーツを行って愉快だった、楽しかったという発言は一つもない。身体運動にかかわって「愉快」、「楽しい」をストレートに表現

したのは家族との遠足に関してくらいであろう。

「福沢諭吉氏は一昨二十九日、日曜の休暇に乘じ、愛嬢三名を伴ひ、午前十時より三田の邸を出で、徒歩にて東海道に向ひ、三女子の足の力のあらん限り歩行して、力尽きたる処にて、大森なり、川崎なり、又鶴見なり、何れの停車場にても汽車に乗りて帰らんと趣向にて、先ず蒲田の梅林にて中食、それより歩を進めて川崎に至り、鶴見近くなりし頃は余ほど疲れたる様にて、左ればここにて汽車に乘らんかと発言せらるれば、又我慢を起し、最早神奈川まで一里余り、無理にもたどりつかんとて、女子の勇を鼓して自から進み、とふと神奈川の停車場に着したるは午後五時半の頃にして、暫く茶屋に休息し、六時三十六分発の車にて帰宅したり。此日他に同伴もなく、親子四人に家僕を召連れ、……東海道中且談し且笑ひ、葦簀張の茶屋に腰打掛けて渋茶を喫し焼芋を食ふなど、令嬢三名は生来始めての挙動にて、少しく驚く中にも其楽しみは限なし。次ぎの日曜にも又何れへか遠足せんとて家君を促して止まずとぞ。是等こそ実に家族団欒の一快楽事なる可し。(明治二十一年一月三十一日時事新報、「家族の遠足」³⁸)

これは、福沢諭吉自身が書いたものだ。福沢の子どものうぶりが確認でき、また彼がどのような状態の身体運動と娯楽との関係が望ましいと考えていたかがうかがえる。

「其楽しみは限なし」とは、子どもたちの本能的な身体運動と喜びと

を最も大事なものとして評価する表現であろう。そんな機会をもつことは「実に家族団欒の一快楽事」なのである。

福沢諭吉の身体運動に向き合う姿勢を観察すると、独立した身体運動としてのスポーツではなく、運動と娯楽、つまりスポーツとレクリエーションが一体となったものを評価する、それなら受け入れるという姿勢ではなかったか。運動と娯楽が一体になったものとは、運動会であり、遠足であった。

人が社会の中で生きてゆく上で「身体運動」は重要な役割を担うとしても、それそのものが人生の目的になるものではなかった。いかえれば、それだけで生きがいになる自己主張のつよい「スポーツ」は、彼にはあまり関心がなかったように思われる。

福沢諭吉は、現代のスポーツ観を先取りしているといってもおかしくないほど、いまのスポーツ観に近い考えをもっていたようだ。最近、到達目標やうまい下手という評価のシステムからはなれて楽しみ、しかも健康に役立つことにスポーツの意義があるという考えが優勢である。このような「やわらかいスポーツ」観のいわば先駆的なものが福沢諭吉にある。

規範にとらわれ、勝負にこだわるスポーツ、きびしい競技スポーツを進んだ文明とみる姿勢から、当時の福沢諭吉は自由だった。

当時存在した日本的「スポーツ」のメニューの中から、自然体として選択した、楽しく、また身体のためになる運動をとりあげて、

これを自分のものにしていった姿勢は、いま考えうるスポーツとのつきあい方の一つの見本になるのではないか。

彼にとつての身体運動・健康の理想形、もうすこし踏み込んだ「日本型理想形」の一つは、娯楽と身体運動が、あいまに入りまじった運動会や遠足ではなかったろうか。

注

- (1) 岩波文庫『福翁自伝』一九七二年 二〇二ページ。(以下、文庫『福翁自伝』とのみ記す)『福沢諭吉全集』第七巻 再版 一九七〇年 岩波書店 一六四ページ。

この時の思い出については、ほとんど同じ内容の文章がある。

- 「彼の上野彰義隊の変は五月十五日の事なりしが、其日は塾にて新舶来の英書『ウェーランド』氏経済論の開講日に当り、講義中生徒は折々屋根に登りて上野の兵焰を遠見したることあり。」(『慶応義塾記事』明治十六年初版、明治二十二年修正再版、『福沢諭吉全集』第十九巻 再版 一九七二年 岩波書店 四一〇ページ)

- (2) 『慶応義塾五十年史』一九三二年 三八八ページ。

また『慶応義塾百年史(附録)』一九六一年 二八二ページの年表、慶応四年の欄に「シーソー、ブランコなどの体育施設設置」とある。

- (3) 『慶応義塾百年史(上)』一九五八年 三一八―三一九ページ。

- (4) 文庫『福翁自伝』二〇二―二〇三ページ、『福沢諭吉全集』第七巻 一六四ページ。

- (5) 同前 二〇三ページ、一六四―一六五ページ。

- (6) 『慶応義塾七十五年史』二九ページ。

- (7) 『福沢諭吉全集』第一卷 三〇三ページ。
- (8) 同前 三〇三ページ。
- (9) 今村嘉雄『十九世紀に於ける日本体育の研究』不味堂 一九六七年 七二五―七二九ページ。
- (10) 私は前稿で「五禽の戯れ(ごきんのたわむれ)」と訓じたが「ごきんのぎ」と読むのが正しいと思う。また「戯(ぎ)」を「たわむれ」と読んで、「知育」に対する「体育」の劣位を読み取るのは速断であり、にわかには断定し難い。ここに訂正する。
- (11) 『慶応義塾百年史(附録)』一九六一年 二八三ページ。
- (12) 文庫『福翁自伝』二八六ページ、『福沢諭吉全集』第七卷 二二三ページ。
- (13) 『福沢諭吉全集』第十七卷 再版 一九七一年 岩波書店 五五二ページ。
- (14) 『福沢諭吉全集』第六卷 再版 一九七〇年 岩波書店 二五五―二五七ページ。「父母の子を養育するは固より天然の至情にして又義務なり。其法如何す可きやと云ふに、先ず第一に子の産れ出たるときは、人間の子も亦一種の動物なりと観念して、其智恵如何は捨て問はず、唯その身体の発育を重んずること牛馬犬猫の子を養ふと同様の心得を以てして、衣服飲食の加減、空気光線の注意、身体の運動、耳目の習養等、一切動物の飼育法にならふて、発育成長を促し、獣体の根本既に見込みを得たる上にて徐々に精神の教育に及ぶ可し。」(二五五―二五六ページ)
- 「兎に角に身体は人間第一の宝なりと心得、如何なる事情あるも精神を過勞せしめて体育の妨を為す可らず。」(同 二五六ページ)
- (15) 同前 二五七ページ。
- (16) 『福沢諭吉全集』第十九卷 四三八ページ。
- (17) 文庫『福翁自伝』三一一―三一二ページ、『福沢諭吉全集』第七卷 二五五ページ。
- (18) 同前 二八六―二八七ページ、二三四―二三五ページ。引用は原文のままとした。
- (19) 『福沢諭吉全集』第十七卷 五七六ページ。
- (20) 同前 六二二ページ。
- (21) 同前 六四三ページ。
- (22) 同前 七〇三ページ。
- (23) 『福沢諭吉全集』第十八卷 再版 一九七一年 岩波書店 一四一ページ。
- (24) 同前 二七七ページ。
- (25) 文庫『福翁自伝』三一四―三一五ページ、『福沢諭吉全集』第七卷 二五七―二五八ページ。
- (26) 同前 四五一―四六二ページ、五六―七六ページ。
- (27) 『福沢諭吉全集』第十八卷 七六三ページ。
- (28) 同前 一五七ページ。
- (29) 『明治二十六年十一月十七日 居合数拔 千本
午前九時十五分より十二時まで 六百四十本
午後二時より三時半まで 三百六十本
以上
刀 鏝元より長さ 二尺四寸九分

目方 三百拾匁

〔明治二十七年十月二十五日〕

居合数抜 千式百本

午前九時十五分より十二時まで

六百八十本

午後二時前より四時まで

五百二十本

刀は二十六年のものと同じ

〔明治二十八年十二月三十一日〕

居合数抜 千本

午前八時半少し過ぎより午後一時までに終り休息なし

刀は前年に同じ〔『福沢諭吉全集』第二十卷 再版 岩波

書店 一九七一年 三九五―三九六ページ〕

(30) 『風俗画報』第七十四号 明治二十七年七月十日「慶応義塾大運動会」二二―二四ページ。

(31) 白幡洋三郎「遊びをせんとや生まれけむ ―近代のスポーツと日本人の身体観・序論」〔『日本研究』第一号 一九八九年 一八四ページ〕。『風俗画報』第四十号 明治二十五年四月十日「運動会とお花見」五ページ。

(32) 『風俗画報』第七十四号「慶応義塾大運動会」二三ページ。

(33) 『福沢諭吉全集』第十七卷 五九九―六〇〇ページ。

(34) 同前 六四三ページ。

(35) 『福沢諭吉全集』第十八卷 一九五ページ。

(36) 同前二〇一ページ。

(37) (20) 参照「……身体摂生の為には金圓を愛しむに足らず……」。

(38) 『福沢諭吉全集』第二十卷 再版 一九七一年 岩波書店 三二―三三二ページ。